宗教の立場で見た「アジア共同体構想と統一思想」

── 人間の本性を通して、その可能性を考察する ──

聖心女子大学教授
張 基槿（チャン キ グン）

1．序論―思想、規範、宗教、至善復帰

列子に栄啓期という人が見える。鹿の裘を被り縄の帯をした貧しい態で琴を鼓ち歌をうたって楽しんだ。時たま泰山に遊んだ孔子が『何んでそんなに楽楽としているのかね！』と聞いたら、答えた。

『天が造った万物の中でも、最貴の人に生まれ、しかも尊厳な男として生き、九十歳の寿命を長らえておる。楽しからずや！』

無神論者である彼は「人・男・壽」の三楽を、実は天に対する感謝として賛美して歌ったわけである。著者である列子は人間の尺度でなく、天の尺度ですべてを見せるために書いたのである。私たちも天尺を準拠にすべきである。

現世に生きているわれわれも、天に感謝すべきである。

①科学が発達し、物質が豊饒な現代に生きているわれわれは、多幸である。

②人間は孤独な存在でなく、40億の全人類と一団となって偉大な事業を成就すべき存在である。壮大ではないか！

③万物の霊長として生まれ、自然万物を主管する人間は、どれほど尊貴な

存在であるか！われわれは重重、天と神に感謝すべきである。

であるにもかかわらず、われわれは天を忘れ、神は死んだとの妄言を弄し、上記の３項目をかえって悪徳化している。すなわち、

①物質と科学によって、人間が疎外され、

②人間達が共同共栄せずに、敵対相殺し、

③尊貴な主管者ではなく、貧婪暴戻な破壊者に転落している。

それで文明人だといえるのか。それが人間の本体、本性だろうか。神は人間たちが相残相殺するように、人間を出生、繁殖させただろうか。また惨劇の場として地球を創造しただろうか。絶対にそうではないはずである。だから今や人類は危機に直面しているというのである。

しかし歴史は発展する。たとえ歴史の記録が汚辱に満ちていても、多くの聖賢善人の時間（縦）的、空間（横）的共同によって全文化の流れがとうとうと続き、実質的に歴史は前進している。宇宙は天道に従って「生生不已」すると信ずる儒教思想と、一方、歴史を神が裏で摂理していると信ずる統一思想の立場では、ともに人類歴史の将来を楽観する。特に、統一思想は人類歴史を、サタン側と神側との闘争史と見なし、今や再臨主の降臨とともに神側の勝利が決定的であり、創造本然の理想世界への復帰が現時代に終結すると信ずる。事実として、人類歴史は個別的分立から全体的統合へと進んでおり、また財物、土地、権力などの争奪闘争から道徳、倫理の規範社会を経て、今や東西の思想、宗教の統一と、それを土台にした「一つの人類世界（one world under God）」の実現に驀進している。

ここに、われわれは世界共同体への基本的前段階としてアジア共同体を構想してみる。

アジア共同体は、ヨーロッパ共同体あるいは東欧共同体などのように軍事的、経済的に相互対立するものであってはならない。

知覚のある人はだれでも世界は一つにならねばならないという。米国やソ連も世界平和を口頭禅にしている。しかし真正な平和共同体は、決して優秀劣敗式の統合であってはならない。軍事、経済の力で制覇統合する強食弱肉であってはならない。従って、米・ソの両陣営を主軸としては真正な世界共

同体を構想することができない。そこで、それに先立つ典範的なアジア共同体を構想してみるのである。しかしここでは「いかなる共同体すなわち内容」よりも「その可能性すなわちいかにすれば可能であるか」を重点的に考究してみた。可能性のない構想内容は無意味であり、今の段階では可能性への考究で精一杯である。

日・中・韓三国は世界の文化や問題の中心地域として浮刻している太平洋圏の核心国であり、長い間、儒教の伝統を共有し、特に現時的には民主自由と共産独裁の決戦場でもあり、一方、宗教思想的には、東西の融合と統一を可能にする聖域でもある。換言すれば、三国を核心とするアジアは古今東西の歴史、文化、思想、宗教ならびに政治までも総決算し得るように神によって選ばれた崇高な使命を帯びた聖域的現場である。

共同体を構成する視点、観点は、「小異」よりも「大同」におかなければならない。

小異の観点とは次のようなものである。自我だけを主張する唯我独尊的な個人や国家の利己主義、外形的個別的特殊性だけを強調する個人主義、武力あるいは物質的価値だけを尊重する現世的武力物質万能主義、形而下の現象だけに執着している社会科学的方式や政治イデオロギーを強調する立場である。一方、大同の観点は内面的本性的な同質性と共同価値を場とするもので、それは自然、道徳倫理や思想哲学ならびに社会規範を経て、ついには宗教信仰の境地である「一つへの帰着」に指向する。

政治や社会学的観点は形而下の殊異な現象を処理統合する点にのみ注がれ、その極は覇道専制になる。従って、それはわれわれが構想する共同体のための観点に不適である。(社会学者たちは現実的にはそれのみだけが社会改造の本であると主張するけれども)

道徳倫理としての社会規範は、儒教思想的観点とともに長い間東洋の伝統社会に根を下ろしてきた。満足なほど完成されたものではなかったが、それは形而上的哲学思想と形而下的行動規範が融合したもので、大きく貢献したものであった。これは無知な野蛮人が長期の遍歴を経て覚醒し、神に帰一するまでの中間段階のいわゆる思想文化の段階である。(無神論的知識人はそ

れを文化の全部だとするけれども)

次に、宗教的境地に立って「一つの神」に帰一する観点は、共同体を構想する上においてはほとんど完全なものといえる。(ただ、無神論的立場だけが「真の知識」であると錯覚する迷妄から脱することができれば)

共同体構想の全提必須条件は求心点としての共同善の設定である。共同善は「何時でも、何処でも、何人にも」至善であるべきである。時・空を超越して公平無私、公明正大、永久不変な「真善美の極致」であるべきである。従って、そのような共同善は形而下的には設定できず、形而上の観念としてのみ設定できるものである。キリスト教ではそれを神の内に認め、儒教では天と天道にそれを求めた。

人類が数十万年の生活史的経験を通じて求め得た天道、天理あるいは神は、あまりにも貴重な、同時に数十万年の人類史上、あまりにも新しいものである。一方、神から無限の知能を賦与された人類が将来成し遂げるであろう科学技能に比べれば、現在の科学業績は微々たるものである。にもかかわらず、科学と物質に眩惑されて「神は死んだ、神は無い」と固執するのは迷妄に近い。「一つの始発点と帰着点を失って」お互いに分裂しお互いに相殺相残しながら、人間の本性、本質まで醜悪なほど歪めている人類の現在像は恐ろしくもある。

果たして人間の本性はどのようなものであろうか。また一方貧婪な野獣性の人間(原罪による堕落人間)を、ただ現象的、外形的に統制処理する今の政治学や社会学の立場で、果たして人類のすべての問題が解決できるであろうか。

人間は本来、野獣に過ぎないと断定したら、虚無と絶望以外に残るものはなくなり、また存在自体を詛呪し、従って知的努力も抛棄しなくてはならない。しかし人間の悪徳認識自体が本性善に基因するものである。だからわれわれは悪から善への復帰に向かって努力し希望を持って前進すべきである。

いかにすれば、われわれは現世的悪徳を克服して共同善を指向する共同体を構想し得るか。本小論では、無知と悪から脱する前段階として、東洋の伝統の核心である儒教倫理思想を提示した。すなわち天道に順応する大同理想

を、規範倫理思想的に解釈してみた。しかし、それだけでは終局的解決は期待できない。どうしても次の段階として宗教的解決を待たなくてはいけない。ここでは統一思想の原理的主張を概観的に示した。総括すれば［2］は思想的側面、［3］は宗教的側面を論じたが、悪から善への復帰の過程として［2］から［3］を展開させた。人間と世界と宇宙の問題は理性、知性だけで解決できるものではない。感性、心霊とともに解決すべきである。統一思想は感性、理性に呼応する宗教思想体系である。

2．儒教の伝統と大同理想

（1）「天道、地徳」と「人行、人道」

中国でも古代には人格神として上帝を信じ天に事えた。しかし殷が周に代わって礼を崇尚した。周を慕った孔子は『民の義に務め、鬼神を敬して遠ざけ（務民之義、敬鬼神而遠之）』<論・雍也>と教えた。一方また『朝聞道、夕死、可矣』<里仁>と言って天と天道を高めた。

天は万物の創造主でもあり、すべての摂理の主宰者でもある。礼記には『万物は天に本づく（万物本於天）』<郊特性>と言い、詩経には『天が蒸民を生み、物と則とを有らしめた（天生蒸民、有物有則）』<大雅：蒸民>と言った。孔子も『為す無くして万物を成らしめるのが天道である（無為而物成、是天道也）』<礼記：哀公問>と言った。特に論語では『天は何も言はない。しかし四時が運行し、百物が生ずる（天何言哉、四時行焉、百物生焉、天何言哉）』<陽貨>と言った。

天は無形である。しかし宇宙万物の本体として時間的には永遠に四時を運行させ、兼ねて空間的にも万物の「生育化成（創造と発展）」を遂げさせる「宇（空間）宙（時間）」の主宰者である。

宇宙は一つの大きな生命体である。天は「一と大の合字」である。天地万物が時間と空間にそって瞬間も休まず「生生不已」する原理、原則がすなわち天道、天理である。

このような天の道理を認識し、実行によって創造と発展を本格的に成就する存在が人間である。ゆえに人間を万物の霊長と称する。

説文には『人は天地が生んだ万物の中で最も貴い者である（人、天地之性最貴者也）』と解いた。「性」は「生や品性」の意味に通じる。従って「人はすべての生物の中で、品性が最も貴き者である」と解し得る。

人間が霊長たる最も重要な要因が2つある。一つは天の被造物である人間は、本性を天から賦与され、その中に、万物を生育させる天地之心と同じ仁心を持っていることである。そして一つは、人間が三才（天地人）の一つとして天地万物の創造、発展に主体的、中心的に同参していることである。

易経には『天地の大徳を生という（天地之大徳日生）』<繫辞伝>、尚書正義では『天地の意は万物を養わんとす（天地之意欲養万物也）』と言った。「人心＝仁心」は「欲養万物」の天地之心」と合一する。説文段注訂補から引用して説明すれば次のようである。

『孟子は仁は人、又仁心であると言った。礼運篇には、故に人は天地之心であるといった。天地は万物を育生することを心としており、即ちそれは天地之仁である。因って人心が生意を有するを亦仁と言うのである。けだし仁は人の人たる所以である。故に仁は人だという。』

> 孟子日仁也者人也。又日仁人心也。礼運日故人者天地之心也。
> 天地以生物為心、此天地之仁也、因而人心之有生意者亦謂之仁。
> 蓋仁即人之所以為人。故日仁者人也。

朱子は中庸集註で『仁は天地が物を生ずる心（仁者天地生物之心）』<二十章>と言った。仁は「愛民」と「利物」とを兼ね「生物開通（創造と発展）」する天道と合一する。

人間は仁心が有るので、三才の一つとして天地化育に主体的に同参することができる。書経に『天工を人が代わってなす（天工人其代之）』<皐陶謨>

と言っているのは、人間が天の代身者として、天地の創造と発展に中心的位地を占めることを示したのである。

人間は行動的に実践し、至誠でもって天道に順い、かつ活用すれば地上世界に良好な成果を得ることができる。すなわち地徳である。徳は得である。あたかも科学者が自然法則を活用して業績成果を得るようなものである。

天地だけが有っても、人が無ければ本格的な創造と発展が期待できない。これを易経の否卦で考察することができる。

否卦は乾（天）が上に、坤（地）が下に居り、「天尊地乾卑、乾坤定矣」<繁辞>である。でも「天地不交而万物不通也」<否卦象文>なので否卦というのである。これを開通成物させるのが人である。即六爻を三才にあてて解けば交通するのである。このように人は天と地の中に立ち、人行でもって天道と地徳を結び、限りなく創造と発展を成就する貴き存在である。これを「通上澈下」「窮理盡性」「賛天地化育」という。人間は本性的に宇宙という一大生命体の創造、発展に同参するようになっている。

天道は真実無妄に「生生不已」であり、その天道に誠実に順応するのが人道である。中庸に言っている。『誠者、天之道;誠之者、人之道也』<二十章>

至誠でもって人道を尽せば万物を養育し、天地化育に同参することができる。中庸の二十二章を原文通りに引用すれば次のようである。

> 唯天下至誠、為能盡其性; 能盡其性、則能盡人之性;
> 則盡人之性、則能盡物之性; 能盡物之性、則可以贊天地之化育;
> 可以贊天地之化育、則可以與天地參矣。

（2）大同の道統と道徳の喪失

天道に順応した人行で樹立する最も重大な地徳が大同世界の具現である。礼記礼運篇に述べられている。

『大道が行われれば天下は公的なものになる。賢明で能力ある人を選び、その人に天下を委ね、人々は信義を守り和睦する。故に自分の父母や子供だけを奉養する利己主義におちず、全ての老人が寿を全うし、全ての壮丁を有用に活動させ、全ての児童を保養育成し、身寄り無き者や、病廃者をも皆保護する。男には職分を与え、女には嫁がせる。財貨が地に捨てられていないようにし、といって独占もしない。能力は皆発揮活用させるが、といって利己的であってはならない。故に謀略が興らず、盗窃乱賊も起こらなくて、外の門を閉めなくてもよい。このような世界を大同世界と言う。』

> 大道之行也、天下為公、選賢與能、講信修睦。故人不獨親其親、不獨子其子、使老有所終、壮有所有、幼有所長、矜寡孤獨廃疾者皆有所養。
> 男有分、女有歸。貨悪其棄於地也、不必蔵於己、力悪其不出於身也、必為己、是故謀閉而不興、盗窃乱賊而不作、故外戸而不閉、是謂大同。

大同世界を今の表現に換えれば『公明正大で公平無私で永久不変な真理が実践され、博愛、平和、正義が実現されている全人類の一家族化された共同の福祉世界である。』そのような大同世界には国境紛争と争奪戦争もなく、利己的国家絶対主義と正反対な、それこそ天が望む地上天国である。

人間が私欲、私心を棄てて、天道、天理に帰一したら、大同世界の実現は可能になる。孔子は論語で言った。『私欲を克服し、天理に復帰すれば天下は仁に帰する。(克己復礼、天下帰仁)』　私利私欲は天下を滅ぼす。呂氏春秋に言っている。『古の聖王が天下を治めるに当たっては、必ず公を光にした。

公なれば天下は平になる。平和は公にて得るものである。歴史記録を見れば、天下を得た衆多の者が、公でもって天下を得、反対に必ず偏私でもって天下を失っている。……天下は一人の天下ではなく、天下万民の天下である。陰陽の和は一類だけを成長させず<万類を成長させ>;甘露や時雨は一物だけに偏私せず<万物を潤す>。万民の主は、私一人だけを利してはいけない。』

昔先聖王之治天下、必先公、公則天下平矣。平得於公。
嘗試観於志、有得天下者衆矣。其得之以公、其失之必以偏。……
天下非一人之天下也、天下之天下也。陰陽之和、不長一類；甘露時雨、不私一物；萬民之主、不阿一人。〈貴公篇〉

六韜文師篇にも次のごとく言っている。『天下は一人の天下でなくて、万民の天下である。天下万民と利を同じくするものは天下を得、天下の利を独占するものは天下を失う。』

天下非一人之天下、乃天下之天下也。同天下之利者、則得天下;擅天下之利者、則失天下。

天の大道を実践して、「天下為公の大同理想」を具現するのが中国の道統である。

道統とは道を守る伝統でもあり、またその伝統を伝え継ぐという意味まで含める。

朱子は中庸章句序で言った。『古の聖神が天道を継承して至極の法度をたててから、道統が自ら伝来した。(蓋自上古聖神、継天立極、而道統之伝有自来矣)』

古代の道統伝承の代表者は「堯舜禹湯文武周公ならびに孔子」である。孔子に対して朱子は同序で『先生は天子の位は得られなかったけれども、往聖を継ぎ来学を開いた功績は堯舜より賢明である』と言った。

若吾夫子、則雖不得其位、而所以継往聖、開来学、其功反有賢於堯・舜者。

「継天立極」の「極」はすなわち「最高、至極、絶対の原理原則」であり、それは「太極」と合一する。「立極」は偏私を棄てた中正の境地でもある。禅譲を実践した堯舜が強調した言葉が「允執其中」であった。中は中正であり「極の中枢、極の軸」でもある。

論語堯日篇には堯が舜に訓えた言葉が見える。『堯がいった。あー、舜よ、天の運数が汝にめぐって来た。允く中を守れ！堯四海が困窮すれば、天禄も永へに終えん！』(堯日)

咨爾舜、天之暦数在爾躬、允執其中、四海困窮、天禄永終

「執中」とは「天道の中心を執って、至中大正な正治をして万民を幸福にしてやること」である。しかしそのような正しい政治、天道に順応した徳治をするには、まず私心、利己欲を抑えなければならない。故に舜は禹に次のごとく言葉を附加した。

『人心は危殆で、道心は隠微である。唯一すじの精誠と誠実で中を守り行え。』
人心惟危、道心惟微、惟精惟一、允執其中。<書経：大禹謨>

蔡沈は次のごとく解いた。

『形気から出たのを人心、義理から出たのを道心という。』
指其発於形気者而言、則謂之人心;指其発於義理者而言、則謂之道心。
『人心は私し易く公し難し、故に危殆だ。道心は明し難く味し易し、故に隠微だ。』
人心易私而難公、故危;道心難明而易味、故微。

『常に道心を主とし、人心が従うようにすれば危殆も安平になり、隠微な道心も顕著し、動静言行に於いて、過・不及の差無く、よく中正を守り得うことが出来る。』

道心常為之主、而人心聴命焉、則危者安、微者著、動静云為、自無過不及之差、而信能執其中允。

仁の実践は自分がするのである。孔子が『為仁由己、而由人乎』＜顔淵＞と言った通り「執中」も自分が人心を克服して道心に順応したときに達せられるのである。

堯舜の念願にもかかわらず、中国の大同理想の道統は断切された。禹王が一家継承のため、禅譲でない私有と争奪が始まった。

公羊学派では哀乱世、昇平世、太平世の３段階をいった。しかし道統の立場からいえば、人間の堕落によって私心がはびこり、天道合一の理想世界が破壊され、遂には私欲、邪心の覇道暴虐が横行するようになった。老子は『失道而後徳、失徳而後仁、失仁而後義』だと言っている。「道→徳→仁→義」は道徳律の発展でなくて、人間悪化の彌縫策として現れたのである。孝経疏では『仁者、兼愛之名; 義者、裁非之謂』と言った。「裁非」とは「非道悪徳を処断することである」。今日の人類社会はどうだろうか。義によって裁非できるような素朴な段階とはあまりにも遠く離れている。酷毒な刑法でも制しきれないほど極悪社会に堕している。国際社会には法などありもしない。あるのは、ただ武力と金力のみである。武力と金力は公然として人間を蹂躙している。しかるにそれが人類発展の当然の帰結だと錯覚している。人間堕落が極に達しているのである。

果たして、人間は本性的に弱肉強食的野獣として生まれたのであろうか。もし、そうだと肯定すれば、学問も思想も共同体構想も無用の長物となる。

東洋の伝統思想は「性善」の立場にたつ。キリスト教も、すべての根源を絶対善の神においている。「本性は善なのだ。悪は人間が過失の結果である」と考えなければ、われわれは帰るところがなくなる。本性は悪だ、行けば行くほど悪くなると考えれば、初めから行く必要がない。

（３）本性と復帰

朱子は「学」の字を次のように解いた。『学は效う。人間の性は善である。しかし覚に先と後があるだけだ。だから後覚者は必ず先覚者の言行を模倣せねばならぬ。すれば本性善を顕現して本初に復帰することができる。』

学之為言效也、人性皆善而覚有先後、後覚者必效先覚之所為、乃可以明善而復其初也。〈論語集注〉

これに対し、論語大全で黄勉斉は『善を明らかにすとは、天下の理を明らかにすることである。其初に復るは、本然の善に復帰することである。(明善謂明天下之理、復其初則復其本然的善也)』、また雲峰胡氏は『人間の性が皆善であるのは、天が賦与した性であるからである。(人性皆善、天命の性也)』と説いた。

中庸では『天命之謂性、率性之謂道』と言っており、朱子は「性＝道＝理」と説いた。雲峰胡氏は次のごとく説いた。『道は即ち理である。人が共に由って行くから道といい、各々に条理が有るという点から言えば理という。(道即理也、以人所共由而言則謂之道、以其各有条理而言則理)』＜大全＞

易繫辞伝では『一陰と一陽が中和して生育化成する道理を道と言い、道を継承するのが善であり、善を成すのが性である。(一陰一陽之謂道、継之者善、成之者性也)』と言った。釈名では『善は演なり。物の性を盡く演ずるなり。(善、演也。演盡物性也)』と説いた。易疏には『道は生物開通である。』『善は順理養物である。』などが見える。朱子は『太極は至極最善の道理なり。(太極只是個極好至善之道理)』＜朱子語類＞と言った。

以上を総合すれば、天道と天理は万物を「生育化成（創造、発展）」させる至善の道理であり、それはすなわち善であり、人間は天から授かった本性でもって天道、天理を覚り、それに順って至善である創造と発展を実行する存在である。人間は天の真理体として、天の創造・発展、天地の化育に同参

するのである。

大学では次のごとく言った。『大学之道、在明明徳、在親（新）民、在止於至善』

しかし現実として生きている人間は清い性理の道心だけの超世的聖人ではない。肉身や形気によって濁らされた人心を持った動物的存在でもある。だから「学」でもって天道を覚悟（サトリ）し、私欲を克服し、本性善を実践的に顕現して、天理の極、至善に復帰合しなければならない。すなわち「克己復礼」すれば、天下に大同理想の華が咲くであろう。

朱子は「明徳」を次のごとく説いた。原文のまま引用する。

> 明徳者、人之所得乎天、而虚霊不昧、以具衆理而応萬事者也。但為気稟所拘、人欲所蔽、則有時而昏、然其本体之明、則有未嘗息者; 故学者當因其所発而遂明之、以復其初也。

「復其初」は「本然の性、すなわち天道、太極、至善に復帰して合一すること」である。人々がそうなれば、「大同之行也、天下為公」の大同世界を実現できると解くのが、儒教の思想や倫理道徳の立場である。

3．宗教による完成―統一思想

（1）創造目的と理想世界

全知全能の自存者であり、無形の本体として永生する神が、何故に有形の宇宙天地を創造したのであろうか。

神の創造目的、すなわち神の御旨を統一原理と統一思想では次のごとく説明する。

『喜ぶためである。』

一般キリスト教では神を「愛の神」としてだけ説くが、統一教会では「心情と愛の神」として説き、特に「心情」に重点をおく。

心情は「喜びを得ようとする情的な衝動」であり、「それが外的に顕現した一種の力が」愛である。だから内的心情がなくては、愛という力も現れることができない。一方、対象がなければ愛を及ぼすことができない。だから次のごとくも説く。『愛は対象を喜ばせるために外に向かって発する情的な力であり、心情は喜びを得ようとする内面の情的な衝動である。』

喜びは相対基準の合う対象があって、その対象のために謀り作し、また愛し、その結果対象が至善の幸福を享受している事実を確認したときに感ずるものである。換言すれば、喜びは、主体が対象を愛し、対象のために尽して、対象から返ってくるものである。対象が不幸、不満であれば、愛を注いだ主体も十分な喜びを得ることができなくなる。

心情と愛の本体である無形の神は、主体者として自己の実体対象たる宇宙天地、自然万物と人間を自己に似せて創造した。その中でも人間は直接的、全面的に神に似ており、ゆえに形象的実体対象と称し、万物は間接的、部分的に似ており、ゆえに象徴的実体対象と称する。従って、人間だけが神の心情とみ旨に応答することができ、神に喜びを返し得る直接的な対象である。そこで神は人間を最も自己に似せ、また最も自己に近い子女としてつくり、人間の本性も神の神性をそのまま似させた。のみならず、神は子女である人間を父母である神の代わりに最高の中心的位置を占め、宇宙、天地、万物を主管するように計った。換言すれば神は人間を通じて創造目的を具現し、いつまでも喜びを得ようとした。

神の創造理想は地上天国と天上天国にわたって実現されるべきものであった。肉体を持って地上に生まれた人間は、神の子女として「神のみ旨に合った一つの人類大家族世界(One World under God)」すなわち地上の理想世界を具現すべきである。そして死んだら、肉体は土に還り、完成した霊魂が天に昇って永生するところが天上天国である。だから神は一次的に地上天国を確認すれば、自然に天上天国も確認することになり、自己の願いであった「喜び」を永遠に得ることになる。このように神のみ旨は無形実体世界である天国と有形実体世界である地上にわたっており、従って、人間は両世界を媒介した和動の中心体でもある。両界の天国は人間によってつくられる。

（2）三大祝福と人間中心

人間を中心に創造目的を完成しようとした神は先に天地、自然、万物を創造し、最後に高貴な人間を自己の子女として生み、その人間に三大祝福を与えた。

さて、人間は神を中心にした四位基台を場として円満な授受作用をしてこそ完成し、神の喜びの対象となることができるのである。また人間は出生と同時に心身が完成するものではなく、蘇生・長成・完成という3段階の成長過程と期間を経なければならない。ゆえに神が人間に三大祝福を授けたといって、その祝福の内容をすぐその場で人間が享受するのではない。

祝福も、「善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きっと死ぬであろう」<創2：17>と同じように神の戒律でもある。すなわち神が言われた「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ。また海の魚と、空の鳥と、地に動くすべての生き物とを治めよ」<創1：28>は人間に命じた使命でもある。だからそれは人間が完遂しなければならない人間に課せられた責務である。それは神の創造目的でもあり、同時に人間の義務でもある。

三大祝福の内容、①生育　②繁殖　③万物主管を統一思想では次のごとく説く。

第一祝福は人間の個性完成、人格完成を命じたのである。神を中心として、性相（心）と形状（体）が良く授受作用して、合性一体化し、個体的四位基台を完成して、神が居し得る聖殿となることである。真正な本然の人間、人格完成の人間になることである。

第二祝福は人格を完成した陽性実体である男性と、陰性実体である女性が、神を中心として円満な授受作用をして、善の子女を殖やすことである。すなわち神のみ旨に合った「本然の家族」をつくることである。完成された家庭は、縦と横とに神の愛が宿ることのできる四位基台であり、それはすなわち天国の基本単位でもある。家庭的四位基台を、社会、国家、世界に拡大、展

開すれば、すなわち「神を中心とした一つの人類大家族世界」になるのである。

第三祝福は万物に対する人間の主管性を完成することである。神の心情と、対象のために謀る真正なる愛を継承して、自然万物を主管すれば、人間と自然が調和し、神のみ旨通り人間を中心に限りなく宇宙的創造と発展を成し遂げ得るのである。そのときには科学と物質が善用され、核兵器の恐怖も、大気の汚染も、地球環境の破壊も惹起されないで済む。

個体完成から家族完成へと展開し、さらに万物主管完成を成就すれば、地上に理想世界が実現し、神の創造目的も一次的に達せられるのである。

（3）人間堕落と復帰摂理

神の子女として生まれた人間始祖である「アダム」と「エバ」が神の戒律を守り、善く、成長し完成し、また三大祝福を履行したならば、神の目的が達成され、神も喜ばれたはずである。しかし、人間始祖が彼らの責任の下で堕落したため、神の創造目的である理想世界が具現できなかったばかりでなく、かえって人間後孫すべてが原罪に落ち、一方神にも悲痛を与えるようになった。

数多くの宗教のうち、ただキリスト教のみが堕落と原罪を認めている。その中でも統一教会の堕落論は最も特別、かつ深刻である。

統一原理では、人間始祖の堕落の経路と内容を大略次のように説いている。彼らの堕落を大きく2段階に分ける。初めはエバが神の言葉に従わずにサタンである天使長の誘惑に乗って霊的不倫の関係を結び、次の段階でエバがアダムを唆して不適時に肉的関係を結んだと説いている。

従って彼らが犯した原罪が血統を通じて後孫に伝わり、兄のカインが弟のアベルを殺害するという堕落人間の惨劇が演出されたのをきっかけとして、その堕落性が今日の人類に伝わり、今日の悲惨な社会相を演出している。

人間始祖の堕落は長成期完成級においてなされたので、もしも彼らが3段階の成長過程を無事に越えておれば、サタンである天使長の誘惑にも乗らな

かったはずである。しかしたとえ彼らが未完成なるが故に堕落したとはいえ、それはどこまでも人間である彼らの責任であったのである。神は「取って食べるな。食べたら死ぬ」と言ったのに、サタンの「食べると目が開く」の誘惑に従ったのである。「死」をも辞せず、誘惑に乗ったのは人間の責任である。そのとき神は人間に創造性、主管性、主体性を与えるために他律的、強制的に干渉もせず、また止めもしなかったのである。

堕落の結果、人間は創造主である神と、一方不倫の関係を結んだサタンとの中間的、矛盾的存在位置に転落してしまったし、また現世的にもサタン主管の下で、サタン中心の邪心に支配される罪の人、罪の世界と歴史を繰り広げている。

今日の人間、すなわちわれわれが原罪による堕落人間であり、罪悪世界から脱出できないとするキリスト教の教理は恐ろしくもあり、また絶望的でもあるが、もっと怖いのは、人間は絶対に自己の単独の力では救済できないという教理である。これがキリスト教の核心であり、これからメシヤによる救済が必然となる。

人類の救済は必ずメシヤを通じてなされるとするのが、キリスト教の鉄則である。従って、他のすべての宗教あるいは思想、学問などは傍系的に神の救済摂理を補佐するものであって、決定的な全面的な完結的な救済はメシヤの出現を待たねばならぬと説く。

それでは、メシアはいつ、どこに、どのようにして降臨するのか。

よしんば人間が自己の過失によって堕落はしたけれども、父母たる神は自分の子女たる人間を捨てることができないばかりでなく、人間中心に理想世界を実現しようとした創造目的を放棄することもできない。そのゆえに、神は人間たちが自分の足でサタン主管下に入った経路とは反対の経路をとって自ら原点まで復帰して、神が降臨させたメシヤに接して救済されるように、4,000年間の悲哀の満ちた蕩減復帰の救済摂理の歴史を広げ、2,000年前に地上にイエスを降臨させた。

しかし、イスラエルの選民が責任を果たさず、かえってイエスを十字架上で死なしめたため、イエスによる救済はただ霊的救済のみに止まり、神の救

済摂理は延長されてしまった。而して、今の時点がまさしく人間が、霊と肉を兼ねて救済され、三大祝福を履行して、神の所願を人間すなわち神の子女たちが完成する決定的な時である。

だから世界人類、特に指導者級の知識人たちが率先して悟り、一日も早く蕩減復帰の原点に戻って、そこでメシヤに接して復帰を完成して、神の目的である理想世界実現に同参しなくてはいけないと説く。

4．結論

本論文は東洋の伝統である儒教倫理思想を学問的に究明するためのものでもないし、また統一思想を解説するためのものでもない。本論文の主眼点は、共同体構想の大前提である「共同善の設定の可能性をいかにして、いずこから探すか」という問題を、儒教の道徳倫理的次元と統一思想のキリスト教的次元に照明して考究してみようとしたものである。

悪でない善なる社会、分裂争奪の代わりに親愛協同する一つの世界を、人間ならだれもが希求している。

一方「お互いに親愛せば、お互いが平和と幸福を享有し、反対にお互いに憎悪すれば、お互いに不安、不幸であるという道理」は三尺童子でも分かる。しかし人間はひたむきにお互いに憎悪し争奪し、お互いに疲れた生活をしている。なぜだろうか。

だれもが渇望し、理想とし、またあまりにも明白な道理が、なぜ数千年間の人類社会では正反対の方向に走り、従って悪徳と覇道だけが横行する現実的歴史だけが繰り広げられたのであろうか。

理性を誇る人間が、なぜその理性では納得できない醜悪悲惨な歴史を記録してきたのか。果たして人間は理性だけで、善世界を具現することができるのだろうか。

やはり、宗教と信仰を土台にしない限り、駄目なのではないか。

至善の境地を、儒教は天で、キリスト教は神で求めている。そして両者は同じく自然への復帰合一を主張している。

ただし、儒教は「学（覚と效）」と「礼（理と履）」を通した理性的自覚と道徳的実践で「自ら至善の境地に向かって進むことができる」と教えているのに反して、一方キリスト教では、「学問と理性だけでは駄目だ。絶対に蕩減復帰した後でメシヤに接して終局的な救済を得なければならない」と説く。そのときに「学問も理性」も神側のものとして有効有用なものになると説く。

統一思想は理性的学問思想と感性的宗教信仰を融合したものである。すなわち科学と宗教を統一したものである。

人間はやはり理性だけのものではない。かといって、濁った堕落性の感性のみに任せられない。血の細胞のすみずみに生きている形気としての堕落性を理性や学問思想だけで清めることはできない。やはり信仰的次元での修道修養がなくてはいけない。

理性と知性だけが全部だと主張しやすい学者であるわれわれから、まず自分の本性復帰に対する深い省察をしなければならない。そして人の問題、社会の問題として共同体構想に進むべきである。根本的解決は、やはり統一思想的立場で求めるべきである。もちろん、現在の段階で学問的に統一思想が完全な体系と論理の書であるというのではない。だから学者の参与と研究が期待されるのである。

参考資料

統一思想から見た人間の本性（本性論）

心情と理法（ロゴス）

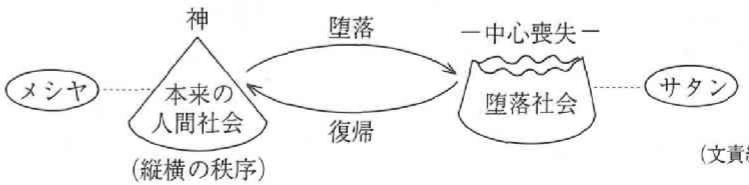
神性の最究極にあるものは、喜びを得るために愛そうとする情的な衝動、すなわち心情である。愛するためには対象がなければならない。そのために、神は理法（理性と法則）によってこの宇宙を創造された。心情は宇宙創造の動機（目的）、理法は宇宙創造の方法であるから、心情の方が中心、主体であって強力である。

理法の働き

理法には、例えば作曲の場合のように、秩序を担う不変な法則的側面と、その法則性を好み（目的）に従って自由に組み変える理性的則法とがある。秩序としては、素粒子に始まって原子、分子、……恒星、星雲というように低次から高次へと積み重ねられていく縦的秩序と、恒星のまわりを回る惑星相互間に見られるような横的秩序とがある。

人間の本性と堕落

神はこの心情の衝動に従って、喜びを得るため、ご自身に全面的に似せた被感覚的実体（人間）を創造され、それを宇宙の秩序の一番中心におかれた。そのため人間は神と同様、その内面に心情と理法を有し、心情の方が主体で強力なものとなっているのである。このゆえに、人間が神以上に天使長（サタン）を強く愛そうとする情的衝動にとらわれたとき、それは創造本然の心（本心）に刻み込まれた理法を越えるものとなり、本来の法則性を逸脱する行動となった。神を中心とするこの法則性の支えによって初めて理性の働きで自由と喜びが得られるようになっているのに、その中心と法則性（縦横の秩序性）を失ったが故に、それ以後は人間の力では収拾不可能な混乱状態となった。この見地から考えれば、儒教は、この一切の愛の秩序の中心たる神との一体化を取り戻す法則的手続き（蕩減復帰原理）と、その方向に人間を押しやる情的駆動力とを無視し、ただその形の上での法則性だけを理性によって取り戻そうとするものなので、当然そこには限界がある。これを可能ならしめるためにはどうしてもメシヤが必要なのである。



（文責編集部）